様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５０３０５

研究課題名（和文）スタンダードを活用する外国語活動教員養成のゲストティーチャー活動モデルの精緻化

研究課題名（英文）Refinement of the Standard-Based Guest-Teacher Project to Nurture Student-Teachers Who Hope to Teach English at Elementary School

研究代表者
松崎　邦守（Matsuzaki, Kunimori）

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：９０５８４１６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：ゲストティーチャー活動モデル(松崎他, 2011)を教員の質保証の観点からInTASC Model Core Teaching Standardsを適宜組み入れ改善・精緻化し、実践の上その効果を明らかにした。個人別態度構造分析の結果、参加者が同実践への参加に満足していたことが示された。また本研究で開発したゲストティーチャー・一見ポートフォリオを分析した結果、スタンダードに基づいた指導案作成や授業実践、ならびに省察活動を繰り返したことが有益であったこと、児童一人ひとりの異なるゴールを明確に意識し教材研究を行ったり観察眼をもっと磨く必要があることなどに参加者が体験的に気づけたことなどが認められた。

研究成果の概要（英文）：This study improved the model which was developed in the 2011-2013 Grant-in-Aid for Scientific Research (C), titled “Construction of a Model to Nurture Student-Teachers Who Hope to Teach Foreign Language Activities at Elementary School”. The InTASC Model Core Teaching Standards were incorporated into the refined model from the point of view of quality assurance for prospective teachers. Moreover, based on the model, a project was designed, where student-teachers of a teacher-training course teach foreign language activities as guest teachers at a public elementary school. From the results of Personal Attitude of Construct Analysis to the participants, it was found that they were satisfied with both getting involved in the project and conducting the foreign language activities based on the model. Also, it was shown that they found it effective for them to repeat designing teaching plans, practicing foreign language activities and reflecting activities for the teaching practices.

研究分野：教育工学

キーワード：小学校英語教育　教師教育

１．研究開始当初の背景

平成 23 年度から小学校高学年において外国語活動が必修となった。同活動は原則的に学級担任が指導するとされ、将来的に小学校教員を目指す学生は、当然その指導に関する力量を身につけておくことが必要となる。しかし、同力量を身につけるには実践場面での経験が重要となるが、外国語活動が教科ではないことから教育実習など正規の実践場面が設けられていない。

ここから、本報告者は平成 23～25 年度基盤研究（C）において、学生がゲスト・ティーチャー(GT)として地域の小学校において外国語活動の授業実践を行う GT 活動モデルを開発・実践した。同モデルには、省察的実践家(Schön,1983)としての教師養成の観点から、授業に対するメタ認知とされるメタ教授(丸野, 2010)を育成するため、学生や大学の指導教員だけでなく外国語活動担当の小学校教員の三者が参加する授業後カンファレンスや、学生が GT 活動に関する学びや体験を蓄積し、それらを形成的および総括的に省察・評価するためのツールとして 2 種類のポートフォリオ(ワーキングおよび一見)を適用することなどを組み入れた。

ところで、文科省に設置された「英語教育に関する検討チーム」が小学校英語の教科化を提案したことを受け、文科省大臣から外国語活動の教科化について早期に結論を得るための具体的検討を始める旨の談話が記者会見において述べられた(平成 25 年 10 月 25 日)。そのことにより、関連するそれまでの知見を基に、外国語活動を教科として指導する教員養成を見据えた研究や実践がその後必要となることが確実視されることとなった。その重要な一つに、近年、社会から強く求められている教員の質保証の観点からスタンダードを基盤とした教員養成が考えられた。

現外国語活動および同活動を教科と想定する担当教員のスタンダードはその時点では策定されていない。そのため、同スタンダードが研究・検討・策定されていくと予想されることから、本研究では、米国で広く活用されている InTASC Model Core Teaching Standards(2013)を参照することとした。理由として、同スタンダードが、①1987 年から長年用いられ 1992 年、2011 年など社会からの要請に応じ適宜改訂されている、②多くの州や専門分野でのスタンダード策定に取り入れられている、③最新の学習科学や教師教育学の知見が活かされ、学習者はいかに学び成長するのか、個の差異を活かす学習など 10 の核になるスタンダードの中で、教師が身につけるべき実践力や必須の知識、構えを、有機的に関連付け構造的に示していることなどが挙げられる。同スタンダードにはポートフォリオの活用が想定されており(Campbell 他, 2013)、力量を教師がどのような過程を経て身につけ成長していくのかが同時に示されている。そこから、「学び続ける教師」の観点からも有益であると考えられる。

２．研究の目的

小学校外国語活動が必修化され、同活動をねらいに沿って指導できる小学校教員の養成は喫緊の重要課題となっている。加えて、同活動の教科化がますます現実味を帯びて議論される中、これまで蓄積されてきた知見を基に、「同活動の担当教員はどのような心構え（個人的特性）を持ち、何を知っていて、何ができなければならないのか」など、明確な根拠に基づく養成が、今後強く求められることが予想される。そこから、本研究の目的は、本申請者が平成 23～25 年度基盤研究(C)において開発した「外国語活動担当教員養成のためのポートフォリオを活用したゲスト・ティーチャー活動モデル」を、同教員の質保証の観点から汎用性のあるスタンダードを本研究の目的に即して組み入れることにより改善・精緻化し、実践の上、その効果を明らかにすることであるとした。

３．研究の方法

上述の背景ならびに目的を踏まえて、InTASC Model Core Teaching Standards(以下 InTASC MCTS）を活用する外国語ゲスト・ティーチャー活動(以下 GT 活動)の設計に関する事例研究を実施した。

(1)研究の参加者・実施小学校

本 GT 活動の参加者は教員養成系大学の学部 3 年生 2 名、同教員 1 名、ならびに実施小学校校長 1 名の計 4 名であった。本 GT 授業は同大学の近隣にある僻地小規模 A 小学校(全児童 15 名)の高学年(5 年生 2 名・6 年生 3 名)の複式学級において実施された。

(2)GT 活動の設計

GT の学習目標は、①自ら選択した InTASC MCTS の達成を目指して、児童が身近な英語表現に楽しく、たくさん触れ合うことができる外国語活動の授業デザインを実践する、②実践後の省察を通して授業改善のための方法を体験的に学ぶ、とした。主な具体的活動は、松崎・田崎・北條（2011）のモデルを参考に以下のとおり設計された。

(3)GT 授業の実践

上記設計に基づき、GT 授業は A 小学校において 45 分間授業として計 5 回(月 1 回)実施された。各 GT 授業の事前活動として GT 協働による指導案の作成、事中活動として GT 授業実践、事後活動として授業直後カンファレンスや GT 授業実践に対する大学での省察活動がなされた。指導案は GT 授業前日までに大学の指導教員に提出され、A 校宛てメールで送られた。GT 授業は GT による TT として行われた。参観者は校長や教頭、学級担任を含む教諭 2 名、大学教員の計 5 名であった。教材は文科省配布の教材を使用せず、GT が児童の学校生活を勘案し考案することが求められた。授業は可能な限り英語を用いて行われた。既習事項を活かし児童の気づきが促され

るよう interaction が重視され子供中心の学びが展開されるよう配慮された。
(4)InTASC のスタンダードに関する学習活動
InTASC の MCTS に対する理解を深めるため、GT 授業の開始前に全スタンダードに関する読解活動がなされた。その後、各 GT は、本 GT 活動で教師として伸ばしたい力量や児童の実態などを踏まえ取り組むスタンダードを自由に選択した。
(5) ポートフォリオの作成
GT は、本 GT 活動での経験や学びについて繰り返しの省察の機会を得ることをねらいに 2 種類のポートフォリオ（簡略ワーキング・ポートフォリオおよび一見ポートフォリオ）を作成した。
(6)リフレクション活動の実施
①ゴールカードの記述
松崎・北條（2007）を基に修正し実施した。同カードには、各 GT が選択した MCTS が明記された。また、同スタンダードを達成するために各 GT 授業に向けて取り組む具体的な手立てが記述された。さらに、各 GT 授業後に省察において明らかになった成果や次回への課題、改善点について具体的に記述された。
②GT 授業直後カンファレンスの実施
GT 授業の直後に授業後カンファレンスを実施した。参加者は GT2 名、校長、大学教員の 4 名であった。
③大学での GT 授業後カンファレンスの実施
GT 授業実施の翌週に、小学校での②のカンファレンスを踏まえ実施した。
④GT 授業後レポートの作成
各 GT は、以上の省察活動において学んだことを MCTS に関連させてレポートにまとめた。
(7)本 GT 活動に対する評価の方法と手続き
分析方法は、ゲスト・ティーチャーの参加者が 2 名であったため、個人別態度構造分析（PAC 分析）を用いた。また、トライアンギュレーションの観点から、本研究において開発したゲスト・ティーチャー・一見ポートフォリオを基に分析した。

４．研究成果

個人別態度構造分析（PAC 分析）の結果、参加者が本研究モデルに基づく実践への参加に満足していたことが示された。また、ポートフォリオからは、スタンダードに基づいた指導案の作成や授業実践、省察活動を繰り返したことが有益であったこと、また特に参加者が任意に選択した InTASC のスタンダード No.2 “ Learning difference(学習者の違い) ”に関連して、児童一人ひとりの異なるゴールを明確に意識し教材研究をする必要性や観察眼をもっと磨く必要があることなどに、参加者が体験的に気づけたことなどが認められた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）
①北條礼子、松崎邦守、金安由里、小学校外国語活動における 5 年生児童の動機づけを高める授業設計とその効果：文字指導とポートフォリオのカンファレンスに着目して、上越教育大学紀要、査読無し、第 34 巻、2015、pp. 203-212
②松崎邦守、外国語（英語）のルーブリックの開発に関する実践的研究、北海道教育大学紀要、査読無し、第 67 巻、2016、pp. 211-220
③松崎邦守、InTASC Model Core Teaching Standards (2013) を活用した外国語活動ゲスト・ティーチャー活動の設計、上越英語研究、査読有、第 17 巻、2017、pp. 3-12

〔学会発表〕（計　１6 件）
①北條礼子、松崎邦守、杉森範子、金安由里高橋俊、加藤絵里、小学校外国語活動における 5 年生児童の動機づけを高めるポートフォリオを活用した授業設計と効果、日本教育工学会、2014 年 9 月 19 日、岐阜大学
②坂田恵子、北條礼子、松崎邦守、藤井裕記、藤田真実、小学校外国語活動における 6 年生児童の動機づけを高めるポートフォリオを活用した授業設計と効果、日本教育工学会、2014 年 9 月 19 日、岐阜大学
③金安由里、北條礼子、杉森範子、加藤絵里高橋俊、松崎邦守、小学校外国語活動における 5 年生対象のフォニックスと英単語を書く活動を組み合わせた文字指導学習プログラムの開発と効果、日本教育工学会、2014 年 9 月 19 日、岐阜大学
④松崎邦守、北條礼子、InTASC Model Core Teaching standards(2013)を活用する学生ゲスト・ティーチャー活動の設計に関する事例研究、日本教育工学会、2014 年 9 月 21 日、岐阜大学
⑤安食正人、松崎邦守、ポートフォリオの活用による自己調整学習力の育成（AR）：中 1 英語科の授業を事例として、日本教育アクション・リサーチ・ネットワーク第 4 回全国大会山形研究大会、2014 年 10 月 12 日、日山形大学附属中学校
⑥松崎邦守、学び続ける英語科教員の育成に関する試み：現職教員と学生の学びの相互架橋を通して、日本教育アクション・リサーチ・ネットワーク第 4 回全国大会山形研究大会、2014 年 10 月 12 日、山形大学附属中学校
⑦坂田恵子、松崎邦守、北條礼子、InTASC Model Core Teaching standards(2013)を援用する学生ゲスト・ティーチャーによる外国語活動授業に関する実践（事例研究）、平成 26 年度日本教育大学協会研究集会、2014 年 10 月 18 日、仙台国際センター
⑧本間奈央、北條礼子、松崎邦守、小学校 4 年生を対象とした文字指導の効果、平成 26 年度日本教育大学協会研究集会、2014 年 10 月 18 日、仙台国際センター

⑨小林瞳、北條礼子、松崎邦守、小学校 3 年生を対象とした文字指導の効果、平成 26 年度日本教育大学協会研究集会、2014 年 10 月 18 日、仙台国際センター
⑩加藤絵里、北條礼子、金安由里、松崎邦守、児玉誉也、楠愛莉香、小学校 3 年生児童の英語の文字の読み書きに関する動機づけを高めるためのプログラムの開発とその効果、日本教育工学会第 31 回全国大会、2015 年 9 月 21 日、電気通信大学
⑪藤田真実、北條礼子、中野博幸、松崎邦守、宮澤俊一、藤井裕記、坂田恵子、和田諭、小学校 6 年生児童の英語学習に対する動機づけを高めるための KINECT を用いた国際交流プログラムの開発とその効果、日本教育工学会第 31 回全国大会、2015 年 9 月 21 日、電気通信大学
⑫北條礼子、松崎邦守、中野博幸、高橋駿、新藤恵子、小学校外国語活動における高学年児童の動機づけを高めるポートフォリオを活用した授業設計と効果、日本教育工学会第 31 回全国大会、2015 年 9 月 22 日、電気通信大学
⑬高橋駿、北條礼子、松崎邦守、小林瞳、中山ひかる、木村理奈、小学校外国語活動における 5 年生児童の動機づけを高める文字指導を取り入れた授業計画とその効果、日本教育工学会第 31 回全国大会、2015 年 9 月 22 日、電気通信大学
⑭藤井佑輔、北條礼子、松崎邦守、本間奈央、幸田勝敏、中村真衣波、小学校外国語活動における 4 年生児童に向けた動機づけを高める文字指導を取り入れた授業設計と効果、日本教育工学会第 31 回全国大会、2015 年 9 月 22 日、電気通信大学
⑮宮澤俊一、北條礼子、松崎邦守、藤井佑輔、小学校 3 年生児童の英語の読み書きに関する動機づけ向上のためのプログラム開発とその効果、日本教育工学会第 32 回全国大会、2016 年 9 月 19 日、大阪大学
⑯北條礼子、松崎邦守、加藤絵里、小学校外国語活動における 4 年生児童対象のポートフォリオを活用した文字学習の授業設計と効果、日本教育工学会第 32 回全国大会、2016 年 9 月 19 日、大阪大学

６．研究組織

(1)研究代表者
松崎　邦守（MATSUZAKI、 Kunimori）
上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：90584160

(2)研究分担者
北條　礼子（HOJO、 Reiko）
上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：50199460